

神野区出身って…転生
早々詰んでるんですけど

雪の轍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比較的モブにやさしいヒロアカだけど

神野区でモブが巻き込まれてめっちゃ死傷者がでたのを

可哀想だなんて思って勢いで始めた物語です。

※大変なご都合主義の上、あまり明るい話ではないので、ご注意ください。

※勢いで始めたので突然消える可能性あり

※神野区の悪夢編を目処に頑張りたい（願望）

※スマホ入力なので遅筆

※原作突入したら公開開始

目次

私の始まり

1.	思い出しました	1
2.	逃げたいんです	6
3.	これからを考えました	23
4.	別れと始まりと	43
	タイムリミットまで残り4カ月	
5.	入学初日	65

私の始まり

1. 思い出しました

うつすらと消毒液の匂いが漂う廊下を一人の男が歩いていった。

男が歩く度、コツコツと靴の音が反響する。

そこはとある病院だった。

すでに時刻は日付を跨ぎ、見舞い客の姿はない。

その日は寝入る人の呼吸音が聞こえてきそうな程、冷たく静かだった。

やがて男は1つの扉の前で立ち止まり、声をかけることなく、中へと入る。

個室の病室には断続的に機械音が響き、部屋の中には一人の少女が横たわる。

酸素マスクと幾つかのコードに繋がれて、少女は眠っていた。

男は一定の音を刻む機械音に僅かに安堵したような、苦虫を噛み締めるような、複雑な顔をしていた。

男の名前は『相澤 消太』

少女の名前は『星川 ほしかわ 結子 ゆいこ』

男は雄英高校の教師であり、少女は男の生徒だった。

ある事件のせいで、忙しく動いていた男が2度も彼女の病室に訪れることになったのは、雄英高校宛に彼女から手紙が届いたからだだった。

男はポケットに手をやると、入っていた2通の便箋が主張するように音をたてる。

1通は自主退学届。

もう1通には彼女からの謝罪の言葉が綴られていた。

—————

先生へ

勝手な事をして、すみませんでした。

学校や先生方、1Aの皆、在学している生徒皆に、

私は多大な迷惑をかけたことでしょう。

それでも、この選択に私は後悔はありません。

—————

———12年前

ちようど物心がついたころだったと思う。

居間のテーブルでクレヨンを握り、ご機嫌に絵を描いていた私は、突然テレビから聞こえて来た高笑いに目を向けた。

その時、私は思い出した。

どうやら私は転生していたらしい……

転生前の自分が一体どこの誰かとか、

一切覚えていないけれど、これは知ってる。

『ハーツハツハ　私が来たア!!』

テレビの中で高笑いしながら巨大敵を殴り飛ばす濃ゆい筋肉を見て、私は呆然と口を開けていた。

ああ、好きな漫画だったなと

ひ弱だった無個性主人公の熱い成長物語で

個性を受け継いで

巨悪と戦う運命を背負うとか……

……ちよつと待って

私は壁に寄せていた保育園のカバンを引っ張り寄せた。

私の通う保育園は、園児の持ち物すべてに名前を書かせる決まりがあり、母がこのカバンにも書いてくれていた。

特にカバンのような大きめの物には落と物をしたときに届けてもらえるよう、住所も。

『ほしかわ ゆいこ』

『よこはましかみのくかみまちにちようめ

ダイヤモンドハイツ102』

私が今住んでるのが、

横浜市神野区上町二丁目の

ダイヤモンドハイツ102号室……

え、あの神野区？

オールマイトとワンフォーオールの激闘の地で

多くのモブキャラが戦闘に巻き込まれて死傷する、あの？

……あれ？ このままだと私も巻き込まれて死んじやう系？

転生より僅か3年。

私、ほしかわ星川 ゆいこ結子は、

自分の人生が既に詰んでいること覚った。

2. 逃げたいんです

神野区が危険だと気づいてから始めたのは、母に引越しをしたいと駄々をこねることだった。

テレビにうつった街を指差してはここに住みたい！と母に駄々をこね、当然のように笑ってスルーされた。

まあ、あたりまえの反応だけど。

幼児があそこに行ってみたいって言ったところで、旅行が精々で引越しまで考えてくれる親なんていない。

3才児が何を言ったところで、本気になんてされない。

何か具体的な理由付けができれば違うのかもしれないが、その具体的な理由が浮かばない。

悶々と悩みながらテレビを見ていると、その時流れたCMに、私は閃いた。

「おかーさんー、わたし、アイドルになりたいー！」

流れたCMはアイドルの歌番組の予告だった。

これなら子供の夢を叶えようと応援してくれるかもしれないし、

デビューできれば事務所のある街へと引っ越しも可能かもしれない。

我ながら良いアイデアだと思ったのだけれど……

その日、母は笑って私をカラオケに連れて行き、採点付きで歌わせた。

母曰く、私の点数越せないならアイドルなんて夢のまた夢と……

ボロ負けした。

幼児相手に大人げないと思う。

てか、母の歌が上手すぎる。

あれは無理、越せない……

しかし他に良案が浮かぶ訳でもなく、私に出来た事と言えば、めげずに引っ越しをねだることだった。

暫く経つても、わがままをやめない私に、母はどうして？と問いかける。

本当の理由を言える訳なく、私から出た咄嗟の言葉は、

「いい、つまんなくてやなんだもん……」

だった。

母はきよとんとした後、何やら思案顔になり、私を抱き上げた。

「ちよっとお出かけしよっか」

茶目つ気たつぷりの笑顔で母はそう言った。

母に連れて行かれた所は、庭の草がのびつばなしの、瓦屋根が所々はげたぼろい一軒家だった。

「ここ、なーに？」

「ここはねー、お母さんの暮らした家だよ」

「おかーさんのいえ？」

「そう。昔のだけどねー。」

でも、小さい頃のお母さんはここで育ったんだよ」

母の話では、母の父、つまり私の祖父が借金を負い、家を売却することになったのだそう。

「二階の右側の窓、見える？」

「うん」

「あそこが私の部屋でね」

「うん」

「ちよつと狭いなって思ったから、勝手に屋根裏部屋を作ったの」

「……うん？」

「秘密基地風にしたかったから色んなギミックを仕込んだの」

「……ぎみつく？」

「そう！ 今はこの家に入れないけど、いつか買い戻したら、結子ゆいこもうんと遊べるわよ！」

ちよつと母の言葉の意味がわからない。

突っ込みどころが幾つかあった気がする。

が、満面の笑みで母は私の反応を待っている。

「……………わー、たのしみだなー」

「そうね！ じゃあ次に行きましようか！」

棒読みだった私の言葉には一切ふれず、母はまた歩き出した。

楽しげな母に、嫌な予感がした。

—————

次に連れてこられた場所はホストクラブだった。

「『ようこそ！』『ホストKAMINOのへ！』」

（いや、ようこそしちゃダメでしょ、子連れ）

「相変わらず顔面偏差値が乏しいわね」

「んなッ!? のつけから厳しーつすよ！ 月子姐さん」

「あら、ほんとのことでしょ？」

親しげにホストを扱き下ろす母に、私は目を剥いた。

母が笑顔で毒を吐いている姿を初めて見たのだ。

「それにしても本日はどのようなご用件で？」

娘さん連れてくるなんて初めてじゃないですか」

「ちよつとこの子に便利なパシ……優しいお兄さん達を紹介しようと思つて」

「今、パシりつて言おうとしました？」

「なんのこともかしら？」

さあ、結句。このうるさいのが接客 巧朗よ」

「あつさり流された……ッ!!」

てか、うるさいって他に説明の使用があるでしょうが！」

「巧朗たくろうのことはそうね……馬1号と呼んでいいわよ。声をかければ、街のどこでもいつでも馬になって遊んでくれるわよ」

「いや！ やらないですから！」

「やってくれるわよ」

「……や、やらな「やってくれるわよ」」

「……………はい」

おい、腰が引けてるぞ接客せつきゃく 巧朗たくろう。

母よりいくつか年下そうではあるが、派手な赤髪と高そうな黒スーツ。

このホストクラブもソファからテーブルまで全て高そうな光沢を放っていた。

ぼろいアパート暮らしの私達とは住む世界が違って見える。

接点など無さそうなのに、一体どこで知り合ったのか……

考え込もうとした私の顔を覗きこみながら母は言う。

「顔は残念だけど、みんな良い人達だから、街の中で困ったことがあつたらすぐ頼りなさい。必ず貴方を助けてくれるわ」

母の透き通った目が私を見つめている。

ホストには大金を巻き上げる怖いイメージがあつたが、母はこの人達を信頼しているようだった。

「……うん、わかった」

頷く私の頭を、母は満面の笑みで撫でた。

「そりゃ、もちろん助けますけどね……いつも一言余計なんだから」

小声でボソボソと文句を言う巧朗は、顔こそ派手なメイクをしているが、母の滅茶苦茶な物言いに怒らない所を見ると、確かに人が良さそうだ。

「……たくろー、これからよろしくね？」

「既に呼び捨て?! こんなチビちゃんから!? ……でも可愛いから許す!!」

巧朗とよろしくの握手を交わすと、母は次に行きましようかと私に話しかける。

「巧朗の他にも、右から端に馬2号〜8号までたくさんいるから、好きなを選んでいいからね」

「「え、俺らもつすか!」」

先程私に向けた時と同じ満面の笑みでホスト達を威圧する母に、私は心に決めたことがある。

母は絶対に怒らせない

怒らせたなら最後、神野区の事件より先に詰んでしまう気がした。

余談であるが、巧朗との握手は、私の手が小さいから掴めたのは巧朗の指先3本だった。

それがツボに入ったのか巧朗はしきりに可愛いと言って、私達が店を出るまでずっと悶えていた。

若干、気持ち悪かった。

—————

次に向かった先は、『ホストKAMINO』の斜め向かいのお店、クラブだった。

店の名前は『Mil^ミky^ルWa^キy^ウa^エy^イ』。

ネオンできらびやかというよりは、シックで大人な印象で、店の名前の天の川をモチーフにした看板と装飾が綺麗だ。

真新しそうな『ホストKAMINO』と違い、結構古いお店なのか、所々壁の色がくすんで見える。

「こんにちは——皆元気にしてる？」

裏口へ周りインターホンを押した母は、元気な挨拶と笑顔で手を振っている。カチャリと鍵の外れる音がし、母に抱かれて一緒に中に入ると、バックヤードから顔をのぞかせた金髪のお姉さんがいた。

「わあ！ やつぱり月子姐さんつきこねえじゃん！ 久しぶりー！

ママ！ 月子姐さんつきこねえ来たよー！

彼女が声をかけた先から、着物の女性……着物を来たマウントゴリラ（おそらくメス）が出て来た。

このお店のママは個性がゴリラなんだろうか……

またゴリラの後ろからこのホステスと思われる綺麗なお姉さん達がわらわらと出て来て、あつという間に私と母を囲んでしまった。

「ちっちゃ！ 可愛いっ!! 月子姐さんのお子さんですよね!？」

「ねえねえこっち見て〜！」

「うわあ！ ほっぺもぶにぶにだよ〜！ 可愛い〜！」

「抱っこ！ 私も抱っこしたい！」

「うるさいわよあんた達！」

てか、その中途半端なメイクで出てくんじやないよ！

開店準備終わってないってわかってんの!？」

「は〜い」

ママの一喝で私達の周りに集まったホステス達は、あつという間にバックヤードへ戻って行った。

正直、助かった。

爛々と輝く目にさらされて、ちよつと怖かったのだ。

あと、勝手にほっぺつつくなし！

ネイル痛いんだからね！

「まったく……あなたも来るなら連絡入れなさいよ」

「ごめんね、ママ。」

でも、思い立ったが吉日って言うでしょ？」

「あなたのその行動力に振り回されるこっちの身にもなりなさいよ……で、何の用なの？ 子供見せに来ただけ？」

「んー、それもあるんだけど、ママさえ良ければ、そろそろ復帰しようかなって」

「え？」

（え？）

私とママは同じくきよとんとした顔でお母さんを見る。

(……………お母さん、元ホステスだったの? ……あ、だからホストの巧朗と知り合いなの?)

「復帰って……………あんた独り身でしょ?」

働いている間、この子どうすんのよ?」

「大丈夫!」

この子ももうトイレ一人でできるようになったし!

なんなら個性で見られるし!」

突如、母がかざした掌からポコンと音をさせ、出てきた三日月型の何か。

まるでクリスマスツリーに飾るオーナメントのようだ。

その三日月には顔の絵が書いてあり、ふよふよと私の周りを浮いていた。

「おかーさん、これなーに?」

「これはお母さんの個性だよ。このお月様が見てるものを、お母さんも見ることが出来るの」

「おかーさんの、こせい……………」

個性の名前は『月』。

掌サイズの月（形は月の満ち欠けによって変わる）を出すことができ、

月が見たものをリアルタイムで共有できるそうだ。

(……あ、そういうえば時々部屋の隅にふよふよ浮いてたかも……う！)

その時、母はご飯の支度をしていたり、洗濯物を干したりと、短くない時間、私から目を離していた。

動き盛りの3才相手に、肝の座った母だなど思ったが、そうではなかったらしい。

母は来週からの職場復帰が決まり、ママに頭を下げて外に出た。

母の暮らした家。

母の知り合い。

母の職場。

全てが神野区に根付いていた。

……なんとなく

なんとなく、母の言いたいことがわかった気がして、

少し胸が苦しくなった。

自然と母の服を掴む手が強くなる。
そんな私の頭を母は優しく撫でた。

「おかーさん、あのね……」

「さー！ 日が暮れる前に次に行こうか！」

「……うん」

母はそれから私を抱いて神野区を歩いて回った。

いつもコロツケをおまけしてくれる肉屋さんや、

鮮度の良い魚を揃えている魚屋さん、

猫の集まる路地裏なんでもものも教えてくれた。

猫達は母のおかげで人慣れしてるのか、私にも普通に触れさせてくれた。

最高に可愛かった。

他にも時期が来れば私も通うことになる小学校だったり、母が幼少期に遊んだ川原。

川原は既に大きな用水路が変わっていたが、そこでは昔、女子グループと男子グループによる仁義なき陣取り合戦があったらしい。

何してんのよ、ちっちゃいころの母。

最後に連れて来られたのは、一本の大きな木の下だった。

「おかーさん、ここはー？」

既に日も暮れ、あちこち回って疲れ始めていた私は、眠気に襲われていた。

「ここはね、春になると綺麗な桜が咲くのよ」

「さくくらっ？」

「そう、綺麗な桃色の花が、この木いっぱい咲いて、花びらがひらひらと舞って、とても素敵なの」

こんなビル街に一本だけ桜の木が残っているのは、不思議な光景だった。

今は葉っぱ一つもついていない桜の木を、母が愛しそうに見上げていた。

「お母さんね、この桜の木が大好きなの」

小さい頃からずっと見続けてきたから」

この先の言葉を、聞いてはいけない気がした。

けれど、耳をふさげば母を傷つける気がして、私は暖かな母の腕に顔を埋め、次の言葉を待つ。

「お母さん、ずっと育ってきたこの街が、
——神野区が大好きなの——」

ああ、言われてしまった。

「春になったら、桜の花を一緒に見に来ようね」

「……うん」

「綺麗なものや、面白いもの、これからたくさん教えてあげる。だから、嫌なんて言わないで」

「結子も神野区を好きになってくれたら嬉しいな」

「……うん……おかーさん、あんなこといってごめんね」

母は首を振って、いいのよと私の頭をまた撫で、帰ろっかと母はゆっくりと歩き出す。歩く度に揺ゆれる腕の中で、私は次第に眠気に負けて、目を閉じていった。

私は母が大好きだ。

今日、初めて知ったことも多かったけど、それでも好きなことに変わりはない。だから、母を危ないこの街から逃がしたかった。

一緒に逃げ出したかった。

でも、母がこの街を好きだと知ってしまったから……

私はもう、神野区から逃げることはできないだろう。

その日見た夢は、帰り際の風景の続き、たくさんの星が輝く神野の夜の街並みだった。

3. これからを考えました

神野区から逃げられないとわかって

神野区のにいれば人生詰んでしまうかもしれないとわかっていても

神野区を見捨てられないとわかったから。

—————

そこから私が1番に取り組んだのは時系列の把握だった。

神野の悪夢が何時おきるのか？

まずそこがわからなければ回避のしようがない。

あの漫僕のヒーローアカデミア画は主人公である緑谷出久みどりやいずくが雄英高校に入学を目指す所から始まった。

まだ彼らが入学し一年生の時の夏。

林間合宿で敵連合に襲撃された。

そこで爆豪勝己ばくごうかつぎが誘拐され、

救出に来たヒーロー達と戦闘になり、

オールマイトがワンフォーオールを打ち倒すも、

神野区の半分が壊滅状態に陥った。

林間合宿のすぐ後ということは覚えているが、林間合宿の具体的な日にちはわからない。

けど、主人公が緑谷出久が入学した年には、

次々に事件が起こって、

雄英高校は沢山のメディアに晒されていたはず。

そこからおよその予測はできるだろう。

家では新聞をとってなかったから、私に出来ることはテレビのニュースにかじりつく事と、それとなくお母さんに探りを入れる事。

まだ林間合宿襲撃のニュースもなければ、

雄英高校にヴィランが侵入したニュースもなく、ヘドロ事件もまだどうやら起こってないらしい。

雄英体育祭のテレビ放送はあるらしいが、肌寒い今の時期ではなく、初夏の季節にある。

念のため、母に雄英体育祭で印象に残った生徒を聞いたところ、おさげの女の子との

回答だった。

私の記憶の中には、主要メンバーにおさげの女の子のいなかったと思う。
主人公達とは世代が違うのだろう。

一先ずは、すぐに事件が起こると言うわけではないらしい。

次に考えるのは、どうやって神野の悪夢を回避するかだった。

【案1】ここに敵連合のアジトがなければいいのだから、地区管轄のヒーローに敵連合が
居着かないよう、見回りの強化と注意を促す。

……………上から目線か!?

誰が3才児の言うことを信じる!?

それにもしも本当にワンフォーオールが神野区に居るとすれば、そこらのヒーローで

は話にならない。

迂闊に手を出すのは色んな意味で危険すぎる。

その時点で神野区が詰む可能性も多いにある。

藪蛇ではなく、藪から先生^{恐怖}つて……………なにそれ笑えない。没。

【案2】オールマイトへ正直に話して助けを求める。

……………だから誰が3才児の言うことを信じる!?

たとえ信じてくれたとして、会えば即戦闘からの神野の悪夢直行コースでしょう。

神野区の壊滅を早めてしまうだけ。

こう思うと神野区壊滅の一端はオールマイトが握っている事になるのか……………ダメ、没!

【案3】オールフォーワンに神野区から出てっつてお願いします。

……………バカなの?

今現在どこにいるかもわからず、

奇跡的な接触が出来たとして、

良くて脳無のうむの実験体、悪くて殺されて終わりでしょうが！

ハイリスクノーリターンなんて誰がするか！没！

【案4】警察に情報のリークをして……【案2】と同じ末路をたどって終わりそう。没。

「あー、だめだ、ぜんぜんいいあんがおもいうかばない……」

——3才の私に、一体何ができると言うのだろう

「結子ー！ ご飯できたから、お皿運んでー」

「はーいー」

今は母のお手伝いくらいしか、できることがない。

立ち向かう力一つなく、私はどうやったら、母を、この街を守れるのだろう。

――――

その日、夢をみた。

あの日と同じ神野区の星空だ。

なぜか私はそれを膝を抱えて見おろしていた。

街の明かりが綺麗で、なんだか泣きそうになると、

誰かがそつと私の肩に手をおいた。
怖がらなくていいと、言われた気がした。

—————

次の日の朝、私の周りには星が瞬いていた。

ふよふよと、私の両手を合わせた位の大きさの星が5つ。
まるでお母さんの個性個性のように私の周りに浮かんでいる。

目をつむる。

目を開く。

星は消えずに私の周りに浮いている。
夢ではないらしい。

「……おかしさんって、つきいがいもだせるの？」

もつと近くで見たいなど思ったら、一つの星が近寄ってきて、手の中に収まった。

つるりとした表面で、星の中心に向かって厚みが増し、星の真ん中は少し凹み、そこには緑色の水晶のようなものがついているようだ。

月のように顔が書いてある様子はない。

裏返したり、くるくると手の中で回してみたり、見れば見る程、この星は、どこかで見たような気がする。

おそらく星川結子^{ほしかわゆいこ}として生まれてからの記憶ではなく、転生前の、好きだったものの記憶……

漫画だと思う。

この真ん中の水晶っぽい所から、レーザーとか、ビームとか出ていた気がする。

いくつもの星を操り、戦う魔物の子ども。

「……………あ、パムーンのほし？」

これも好きな漫画だったと覚えている。

百人の魔物の子どもが次の魔界の王様を決める戦いに挑む物語。

そこには本当に沢山の魔物の子ども達が出てきて、性格も能力もそれぞれ。

そして、主人公の魔物の子は、パートナーの人間の少年と心を通わせながら、優しい王様目指してまっすぐに成長していく。

主人公達の心根のよさに仲間も沢山集まって、この星を使う魔物の子も、最初は敵だったけど、戦った後は主人公に味方して、力を貸してくれた。

登場したのは僅かだったけど、自分の弱さを認め、恐怖トラウマに立ち向かって主人公に力を貸そうとしてくれた良い子だった。

「たしか、じゅもんは……ファルガ？」

瞬間、星は光り、レーザーが出た。

星を手を持ち、覗きこんでいた私の顔に向かつて。

レーザーに弾かれた私は大きく仰け反って、後頭部を強く床に打ち付けた。

「ちよっと、何、今の音……結子ゆいこ!? どうしたの結子!?」

気を失った私を、母は慌てて病院に連れていった。

この日、私に個性が発現した。

——個性の名前は『星』^{ほし}。

パム^あー^子ンの、誰かを助ける事ができる強い力だ。

この力があれば、私は神野の街を守れるだろうか。

—————

個性が発現してから、私がしたことは体力づくりと個性の訓練。

今までの主な一人遊びだったお絵描きから卒業し、保育園が終わると私は神野の街をひたすら走り回った。

母に連れて行つて貰った所、そうでない場所、危ない路地裏はなるべく避け、

走つて疲れては休み（巧朗たくろうが本当に馬になってくれた）、

また走つては休み（『Milky Way』に寄つたらママがオレンジジュースをくれた）、

また走つては休み（お肉屋さんでコロツケをくれた）、

暗くなる前に走つて家に帰る、

そんな生活を始めた。

3才児が一人で街を走り回るのは異様なのか、何度か迷子として保護されかけたが、今のところ全て走つて逃げきっている。

3才児にしては、私は足が速い方なのかもしれない。

個性の訓練は、母から教えて貰った用水路（昔、川原だった所）で行った。

人気がなく、用水路上に渡る橋の間隔も広い為、水の上であれば、レーザーを打つても誰にも当たらないから。

レーザーを打つ時、特に呪文を唱える必要はないようで、打とう思えばいつでも打つことが出来た。

しかし、レーザーを打つと直ぐに疲れてしまい、連射することは出来なかった。

出せる星の数は今のところ5つが限界で、パムーンが操る星の数には遠く及ばない。

また、5つ別々に動かそうとするのはとても大変で、やれなくはないが、とろとろとしたスピードで動かすのが精一杯で、星を動かす事に集中していると私自身は一步も動く事が出来ない状態だ。

要練習する必要がある。

ある程度星を操りながら移動もできるようにになりたい。

レーザーの他にも、星と星をエネルギー状の紐で結んだり、切り離したり、星をいくつか集めた間にエネルギー状の膜を張ることで盾を作れたりもする。

パムーンの星は汎用性が高い。

また、母の個性を引き継いだ部分もあるのか、星のある周囲の情報がある程度知覚することが出来た。

色や形、あるいは温度の情報まで母と共有できる『月』と違い、私の場合は壁があれ
ばぶつからないように避ける事ができる程度だ。

感覚としてはコウモリが超音波で周囲を認識しているのに近いと思う。

補足であるが、私は星を出す時、母のように手をかざす必要はなく、出ろと思えばポ
コンと音をたて、空中に現れる。

ただし、消すときは消えろと念じても消えず、一つずつ手をかざす必要があった。
星が手の中に吸い込まれるように消えていくのだ。

一体何を原材料に生まれ、何を私は取り込んでいるのだろうか……考えるときちよつと怖
い。

そんな考察を重ねつつ、レーザーの飛距離やら、一斉射撃はできるのかとか、どのく
らい打てば疲れ、回復まで掛かる時間などの実験を重ねていった。

しかし、それは長く続かなかった。

私のレーザーはさほど発射音などはしないが、結構眩しく輝く為、目立つ。

また、街内を爆走する3才児も珍しく大変目につく。

何度か通報があつたのか、私は地区管轄のヒーローに見つかつて、母の元に連れ戻され、母共々説教を受けた。

私のせいで怒られる母を見て、罪悪感が半端なく刺激された私は、大いに泣いた。

転生しようと、今の私は3才児である。

感情の制御なんて、できるわけではない。

そこで困つたのは私を母の元に連れてきたヒーローで、(この人も真面目に仕事をしただけなのに、本当に申し訳ないと思う)ギャン泣きする私にある提案をしてくれた。

体を動かすのが好きならパルクール教室があるので、参加してみないかと。

パルクールとは、走る・跳ぶ・登るといった移動に重点を置く動作を通じて、心身を鍛えるスポーツらしい。

後日、母と共に見学してみると

まるで忍者のように障害物を飛んで乗り越えたり、

塀の上を器用に走ったりする人が沢山いて、

テンションが上がった私は早速母におねだりし、

無事パルクール教室に通うことになった。

また、個性の訓練はというと、流石に禁止された。

私有地内であればまだしも、公共の場での個性の無断使用は犯罪だからだ。

今回は私が個性を発現したての3才児であったことからおとがめなしたが、母にはよく注意するよう言われていた。

しかしボロいアパートに個性を使えるような庭も部屋もない。

これからはもつと見つからない場所を探して訓練する必要がある。

レーザーを打つと目立つのだから、今は星の操作性向上を目指そう。

沢山の星を動かしながらパルクール出来るようになるのが目下の目標である。

そしていつか、しっかりと個性を使いこなせるようになるう。

私が個性に目覚めて、個性がパム^星ーンの力だと知って、一番嬉しかったのは盾を造れるということだ。

今はまだ、盾自体ふにやふにやしたもののしか造れないが、しっかりとした盾を張る事が出来るようになれば、神野の悪夢を回避する事が出来ると思うのだ。

街を覆うほど広範囲に、またビルをいくつもなぎ倒す衝撃に耐えられるような強靱な盾を張れるようにならないが、個性は使えば使うほど伸ばせ、強化できるものだとは知っている。

エックスデーまで間に合うかわからないけれど、

やれなければせっかく見えた僅かな可能性もなくなってしまうから、頑張ろうと思う。

その為にも、ヒーロー免許を取っておかなければならないだろう。個性の無断使用が犯罪である以上、いざ盾を張ろうとした時に敵と勘違いワイランされて捕まったりしては元も子もない。

ヒーロー免許をとるならヒーロー科のある学校に通わなければならない。

そしてヒーロー科のある学校で最たるものは主人公達の通う『国立雄英高等学校』だろう。

ヒーロー育成の為のカリキュラムや施設、環境は随一だ。

ただし、その分志望する人も多く、入学の為に必要な偏差値はなんと『79』。

ちよつと頭がおかしいレベルである。

「……べんきよう、いまからやればできるかな？」

私のこの頭、好きな漫画とかは前世から引き継いで覚えてるくせに、勉強の事はあまり覚えてないのだ。

英語？関数？なにそれ美味しいの？

社会や歴史はそもそも根本から違う。

……私、雄英高校、目指せるでしょうか？

4. 別れと始まりと

そして、時は流れて9年後……
私が12歳の時だった。

外では忙しく蝉が鳴いている、
茹だるような蒸し暑い夏の日だった。

母が病気で亡くなった。

まだ年の若かった母は、病の進行が早く、おかしいなと思った時には、手の施しようがない程に進んでしまっていた。

この超常社会でも、治すことが出来ない病はあるらしい。

お葬式の準備は『MilkyWay』のママさんや、巧朗たくろうがしてくれた。

母の親族は既に亡く、どうやら天涯孤独の身であつたらしい。

それでも母のお葬式には沢山の人が来てくれた。

『MilkyWay』のお店の人やお客さんだった人達、『ホストKAMINO』の人、街の商店街の人、私がつ通つていたパルクール教室の人達、あの時ちよこつとだけお世話になつたヒーローの人も来てくれた。

母は沢山の人に好かれていたらしく、娘として嬉しく誇らしい。

今後をどうするか、どうしたいかをママや巧朗に聞かれた。

施設に行くのではなく、このまま母と暮らしたアパートに、神野の街に住みたいと言つたら、難しい大人の事情とかは二人でなんとかしてくれた。

お金も母が私の為にと沢山貯蓄を残してくれていたことを知つた。ちよつとビックリするぐらいの額の貯蓄に、母の月収が一体いくらだったのか……恐ろしい。

また保険もおりて、すべての財産が私の手元にきた時、過ぎるほどの大金に少々気が

遠くなった。

どれくらいの大金かというのと、もう一度生まれ直して、普通に義務教育を卒業し、大
学へ進学して尚、暫くは何もしなくても生きていける程。

そしてもう一つビックリした事がある。

母の実家が還ってきたのだ。

どうやら入院中の空いた時間に買い戻していたらしい。

道理で母の病室には、人の出入りが激しかった訳だ。

巧朗も使いっぱしりにされていたのか、忙しそうにしていた。

修繕までは手をつけられなかったらしいが、いつかいつかと言っていた家が還ってきた
事は感慨深い。

このまま修善をして、アパートから移るかも考えたけれど、まだ暫くはアパートに住
み続ける事にした。

私と母の思い出が残っているのはこのボロいアパートだったし、移り住む時は母と一

緒がよかったから、まだ気持ちの整理がつけられない。

維持費に消費はかさむだろうが、私の気持ちの整理が着くまで、母の実家には待つていてもらおう。

母の実家が大事な事にかわりないし、これからもずっと大事にしていきたいと思う。

また、母が入院中に初めて聴いた事がある。

私の”父”についてだ。

話を聴いた時、母はほんのり照れくさそうにはにかみながら教えてくれた。

出会いは”ホステス”と”お客さん”だったそう。

父はサポートアイテムを販売する会社の開発主任をしていたらしく、大変優秀だったのだと。

そんな父の慰労を兼ねてか、会社の役員さんが母の居るクラブ『Milky Way』へ連れてきたらしい。

余談であるが、巧朗との出会いもこの時だ。

この時の巧朗は父と同じ会社で働いており、営業の若手トップとして、父と同じく役員に連れられていた。

父は最初はまったく話そうとせず、おどおどとしていたそうだが、母が自分の部屋を改造した事があると話に出すと面白い程食いついたそうだ。

母も父も、もの改造くりするものが趣味だったから会話が弾み、いつしか恋するようになったのだと。

順調に愛を育み、ちやうど母と婚約した頃。

父の会社に巨大化した人が突っ込んで来て、それに巻き込まれて父は亡くなった。

父の会社に恨みがあつたという訳ではなく、ただ酒に酔つ払つた末の個性暴走による事故だった。

あまりにも突然で、母は泣いて泣いて、暫く家に引きこもるように暮らしたと言う。

そんな時だ。母が私を妊娠している事を知つたのは。

自分は天涯孤独の身で、

まだ挨拶にも伺えてなかつた父の親族を頼る訳にもいかず、

普通なら産むのを躊躇ちゅうちゆつてしまいそうな状況で、母は即決した。

「絶対私が幸せにするからねって」

「お父さんのことを話すの、ちよつと恥ずかしいし、今でも思い出すと悲しくなっちゃうこともあるから、今まで言えなかつた。ごめんね」

首を振る私の頭を、母はいつものように優しく撫でた。

「結子の柔らかい髪や目元なんか、本当にあの人にそっくりで、結子に初めて会えた時、すごく嬉しかった」

髪の毛から目元へ、母の細くなつてしまった手がなぞる。

私を見つめる母の目に仄かに見える、心配の色。

「ねえ、結子ー」

貴方が、何か、やりたいことがあつて、その為に勉強や運動とか頑張つてたことは知つてる。

その何かを……私は気づいてあげられなかった」

これは母が何年も胸に溜めていた言葉なのだろう。
母はまつすぐに私を見つめている。

「あ、のね……お母さん、それは……」

どう説明すればいいかわからず、それでもなんとか言葉にしようとする、母は私の口の人差し指を置いて首を振る。

「わからなくてもいいの。それでもずっと結子のそばで応援してあげようと思ってたの……でも、ごめんね。もう少し、一緒にいてあげられると思ってた」

胸が痛かった。

なんで母は私を問い詰めないのだろう。

なんで私は……こんな時になっても、母に打ち明けられないのだろう。

「……………やだよ、謝らないでお母さん」

「結子は一人で頑張り過ぎちゃう所があるから、ちゃんと周りの人を頼るようにね」

「ねえ、やだつてば、今そんな事言わないで……」

「今だからちゃんと言うんでしょ」

「だって、泣いちゃいそうだから……」

「ふふ、もう泣いてるじゃない」

母は私の涙を掬って、そつと小指を絡ませる。

「約束する。お母さんはこれからもずっと、結子の幸せを見守ってるから」

泣くのを堪えきれなくなった、私の顔はきつとすぐくブサイクだっただろう。
そんな私を母はぎゅつと抱き締める。

「おがあさん、だいずぎ……!」

「私も結子がだーい好き!」

その日の母の笑顔を、私は一生忘れない。

—————

そして、また時は流れて

3年後の、2月26日。

雄英高校の一般入試の日である。

受験票に筆記用具、また普通の受験では使わないであろう運動着。

忘れ物がないか再確認し、私は雄英高校の巨大な門を潜る。

巨大なのは門だけではない。

ガイダンスが行われる講堂しかり、ここまでの通り路で見た教室や、昇降口、下駄箱、そもそも廊下自体が幅広く、全てがビッグサイズだった。

流石、雄英。規格外である。

自分の受験票の番号を確認しながら、講堂の席に座る。

既に沢山の人で溢れる講堂の中は、受験前のピリリとした空気が流れていた。

そして時間となり、現れたのはプレゼントマイク。

やかましい程のハイテンションでガイダンスは始まった。

これから行われるのはヒーロー科志望に実施される実技試験。

私達受験生はいくつかの演習場にわかれ、ワイラン 仮想敵と戦うことになる。

仮想敵は1Pと3Pの種類があり、多くのポイントを稼ぐのが目的とプレゼントマイクが説明したところで、一人の受験生が声高々に質問を投げ掛けた。

制服をきつちりと着こなした、少し神経質そうに見える眼鏡の少年。

私は彼の名前を知っていた。

——飯田いいた天哉てんや。

緑谷出久主人公のクラスメイトになる、主要メンバーの一人。

彼がいるという事は、その近くには緑谷出久と爆豪勝己がいるはずだ。

(やっぱり同じ年だったんだ……)

去年の春先、ニュースでヘドロ事件が取り上げられたのを見た。

(欲を言うなら、ヒーロー免許を取り終えた後で、個性をもつと鍛えた後がよかつたけど……)

震えそうになる手を拳を握る事で抑える。

(ポジティブに考えよう。タイミングを計りやすくなつたつて事だから)

しかし時間がないのは確かで、足踏みをしてる余裕はもうない。

この入試に必ず受からなければならなかつた。

運動着に着替え、私は演習会場Cに来ていた。

市街地を横した演習場は大きく、左右を見渡しても、かろうじて演習場の端が見えるか見えないかという程だ。

こんな演習場が何個もあるつて、やっぱり雄英高校は半端ない。

会場の中に少し入ると、足元に線が引かれていた。

どうやらこの線がスタート位置らしい。

続々と先頭目指して受験生達が集まってくる。

私は先頭から離れ、ゆっくりと受験生の顔を見回す。

(知ってる顔は、無いか……あ、いや、あの紫の髪は、もしかして)

そつと近づいて様子を見ると、予想は当たっていた。

紫色の髪に、不健康そうな目の下の隈。体が細く、ヒョロリとした男子は、心操人使しんそうひんどしだろう。

主人公達と出会うのは体育祭の時で、彼は普通科に通っていたはず。

(……なら、心置き無く)

ヒーロー科のクラスメイト(予定)がいないこの演習場であれば、気兼ねなく全力を出せる。

(筆記が不安な分、実技では多くのポイントを稼ぐ！)

やるなら徹底的に、圧倒的に。

『ハイ、スタートー』

プレゼントマイクのちよつと間延びした声がかかると同時。

ーキイーンー

金属音に似た甲高い音をたて、『星』を形成する。

その数“50”。

星を出せる数は成長していくにつれ次第に増え、

出現時にポコンと可愛らしい音をたてていた星は、形成スピードを早くしようとすればするほど、鋭く甲高い音へと変化した。

一目散に星達は市街地内へ散らばる。

操作性の向上目指して頑張ってきた甲斐があり、今では星の一つ一つを自在に動かせ、飛ばすスピードも風切り音がするほどになった。

自分から遠く離れる程、操作性は落ちてしまうが、それでもこの試験会場の市街地内であれば隅々まで星を行き渡らせることが出来る。

目を閉じ、星から感じ取れる情報にのみ集中する。

大通り、建物の間、ビルの屋上、街のいたるところに動く無機物の反応。

「オーファルガ」

一斉に星からレーザーが放たれ、空から無数の光が仮想敵^{サイラン}目掛けて降り注ぐ。

遠目に見える光の雨を、他の受験生達は啞然と見つめていた。

そこに再度プレゼントマイクから走れ、賽は投げられている、と発破がかけられ、ようやく動き出す。

出遅れたと焦ったのか速く遠くを目指して走りだし、スタート地点には、ほぼ受験生の姿がなくなった。

多くの星を同時に動かす為、集中を要し身動きがとれない結子の他、既に受験を諦めてたのか、うなだれるように立っている人が数名である。

その数名の中に、心操の姿もあった。

話しかけたのはちよつとした好奇心だった。

「ねえ、貴方は行かなくていいの？」

彼は驚いたように此方を振り向いた。

「……関係ないだろ。あんたには」

「まあね。でも君はヒーローに成りたくてここに来たんでしょ？　もう諦めちゃうの？」

心操は顔を歪めて何かを言おうとして、また口を閉じて息を一つ吐いた。

「……あんたみたいに、あつらえ向きの個性を持つてる奴に、わかるわけないだろ」

「……そう。でも、ここまで個性を伸ばすの結構大変だったよ？　それに、身体を鍛えるの

も」

一度、星からの感覚共有を切って、心操に向かつて走り出す。

拳を握り締め、大きく振りかぶる。

ぎよつとする心操の後ろ、1P仮想敵ヴァイランに向かつて拳を振り抜く。

視覚センサーがあると思われる頭部を狙ったら、そのまま仮想敵ヴァイランの頭部が千切れとんだ。

「うわ、思ったより脆い！」

バチバチと音をたて動かなくなる仮想敵ヴァイランと私とを交互に見比べ、驚きを隠せず固まる心操に思わず笑ってしまった。

「言つとくけど、私が怪力な訳じゃないからね。

一般の中学生に相手させるとだから、仮想敵ヴァイランもそれなりのものでしかないんだよ」

もちろん素手で破壊するのはきついだろうが、持ち込み自由なこの試験。

私は鉄鋼入りグローブを申請していた。

そのグローブを外し、心操に向かって投げしてみる。

心操は危なげにそれを受け取った。

「突っ立ってないで、やるだけやってみれば？」

私も絶対受かりたいから、もつと頑張る」

—————

——モニタールーム

薄暗くした部屋にモニターの光が眩しい。

「すごいですね、彼女」

「開始早々、最高得点ですよ！」

各、試験会場をモニター越しに試験官である雄英教師陣がチェックしているが、一際目を集めたのは試験会場Cだった。

開始3秒にして、3Pを7体、2Pを14体、1Pを29体の仮想敵ワイランを行動不能にし、計78ポイントを取得した少女、

——星川ほしかわ 結子ゆいこ。

「着実に得点を伸ばしてますね」

「お！ 今度は階段使わずにビルの屋上まで上ったぞー！」

「壁の間を蹴って登るって、忍者ガールかよ！」

「ただのパルクールだ」

「それでも凄い。どれだけ練習を重ねたんでしょう」

「救助ポイントもちやんと稼いでるわ」

「あの星、レーザー打ったり盾になったり、視覚外のロボも壊してるからセンサーも兼ねているのか……汎用性が高いな」

モニター越しに、少女はビルの屋上に立ち、突如暴れだしたOPのギミックを見据えていた。

試験時間は残り僅かである。

—————

暴れ、市街地を破壊するOPの仮想敵サイランに、下にいる受験生達は皆逃げ出していた。雄英高校を受験するだけあって、避難に入るのが早い。

(想像よりずっと大きい……星一つのレーザーじゃ貫通させられる威力ないし、倒すのに時間がかかる)

時間がかかれば、それだけ街を破壊される。

破壊される演習場が一瞬神野区の街並みと重なった。

(「ーうん、縛ろう」)

星をOPの周囲に集め、星と星とを光で結ぶ。

網状に張り巡らせた星達を全て光で結び、OPは手を振り下ろそうとしている体勢でその場に固定された。

この光の紐はレーザーと同じエネルギー状であるが、拘束する事が目的の為、触れさせてもダメージを与えさせない。

技名すらないこの技は、パムーン自身が持っていた固有の能力だった。

ギチギチと音をたてるOPヴィランは拘束されて尚、動こうとするのを止めない。

この技でこんなに重量のあるものを拘束するのは初めてだ。

巧朗を縛る程度なら負荷はかからなかったが、今はOPに抵抗される度、指先からひきつれたような痛みが全身へ拡がっていく。

けれどここで拘束を解く訳にはいかない。

例え演習場とわかっていても、市街地をこれ以上破壊されるのは我慢ならなかった。

「ー街を壊すな、クソヴィラン 敵………！」

痛みに歯を食いしばり、OPを更に強く縛り上げようとした時、プレゼントマイクの終了という声が試験会場中に響き渡った。

雄英高校 一般入試

実技試験が終わった。

タイムリミットまで残り4カ月

5. 入学初日

春。

私は再び雄英高校を訪れていた。

校内案内を片手に、向かう先は1Aの教室。

結論からいうと、私は無事合格した。

—————

入試から1週間後、私の手元には雄英高校の合格通知が届いていた。

我が家の居間には、私以上に受験結果を心配していた巧朗と『Milky Way』の

ママが来ていた。

二人とも私の筆記試験が合格ラインぎりぎりだった事を知っている。

特に勉強を教えてくれていた巧朗は心ここにあらずの状態で、時折、平方根や円周率を永遠と壁に呟く奇行にはしまったので、その度に少々乱暴に目を覚まさせる事になった。

「……映すよ？」

「あ、待って、まだ心の準備が……ッ！」

「男が何女々しい事言ってるの！ 結子、やんなさい！」

「はーい」

ママのゴーサインで私は合格通知の中に入っていた映写機のスイッチを押した。

—ブーン—と音を立て、ホログラム映像が空中に映し出される。

映像の真ん中には、目に大きな傷跡がある服を着た小動物。

『やあ！ 雄英高校校長、根津さ！ 早速結果を伝えるね！』

まずは実技、これは問題なく合格だよ！ むしろ君は群を抜いていたね！

開始直後の一斉射撃で取得した敵Pはなんと”78”！

これだけで実技2位の総ポイント数を上回るね！

最終的に取得した敵Pは合計”93”P。

本当に素晴らしいよ！

また、あのOPの仮想敵ヴァイランを拘束するだけの技術！

街への被害を抑えようとする立ち回りは高く評価させて貰ったよ！

そして今回の実技試験、実は敵Pヴァイランの他にも救助活動Pレスキューも見ていたんだ！

君は移動の最中、他の受験生が危険になった時には盾を張ってくれていたね。

助けられた子ども達に代わってお礼を言うよ、ありがとう！

すれ違い様の一瞬の判断力、盾を形成するスピード！

こちらは大変素晴らしい！

君が獲得した救助活動Pは”22”P。

合計”115”Pで実技試験一位の成績さ！

この試験で百点を超える生徒なんて久しぶりに見たよ！

そう、実技試験だけで考えれば君は大変優秀だ……ただ筆記試験も合わせると、残念ながらと言わざるをえないね。

君はヒーロー史と英語が苦手のようだね。他の科目もケアレスミスが多い。

書き終えた後の見直しを丁寧にするだけで君はもつと伸びるさ！

その為には時間配分も大事で、あ、もう時間かい？

星川ほしかわ 結子ゆいこくん！春にまた話の続きを聞かせるよ！

つまり、合格さ！

首席合格は惜しくも逃してしまったが、総合的に大変優秀な成績だった！
雄英高校は君の事を待っているよ！

そうそう！今年は君たちヒーロー科の皆に朗報があるんだ！

驚くことになんとあのオールマ』

ブツ―と音をたて、そこで映像は停止した。

「話長ツ!! 最後途切れたし!？」

「最後のなんだったのかしら……?？」

「後で学校に問い合わせてみるよ（なんとなく言おうとしたことわかるけど）」

ホログラム映像が消えたにも関わらず、未だに空を見つめる二人を不思議に思いつつ、映写機を片づける。

他の同封書類に目を通し始めた時、巧朗が恐るおそると私に振り向いた。

「……あの、合格で間違いないんすよね?？」

「そうだね。やっぱり筆記が危なかったみたい。実技で稼いどいて良かった!」

「……ツよくやった!! 結子、アンタ春から雄英生よ!」

「おおおお! お嬢おめでとう!!」

「うわっいきなりうるさっ!?!……でも、ありがとう二人とも」

「合格祝いしましょう! 『ホストK A M I N O』で! 今日臨時休業にするんで!」

「いやそこはちゃんと働きなよ。私も入学準備したり良い物件探さないとイケないし。気持ちだけ受け取っとく」

「……ああ、そうよね。なるべく学校に近くて、セキユリテイがしつかりしてる所を探しましよ」

「セキユリテイに関しては別に、私もヒーロー科だし……家賃安くて、寝るスペースさえあれば、まあいいかな?」

「バカ言うんじゃないよ、あんたはまだ子ども、それに女の子なんだから。家賃のことも何も気にしなくていいの、入学祝いだとも思っときなさい」

「入学祝いの規模が大きいよ、ママ……」

「ん? なんの話っすか?」

「とんとん拍子に話が進む中、取り残された巧朗が一人首を傾げる。

「決まってるでしょ? 春からの住むところ探しよ。雄英に通うんだから……あんたまさか

「ここから通うと思ってたわけじゃないでしょうね？片道2時間はかかるのよ」

「……………!!? そ、そんな、お嬢、春から神野にいないんすか？」

「雄英に通うことになったからね」

「……………!!?!」

「シヨックを受けた所に追い討ちかけるようで悪いけど、ヒーロー科は土曜日も授業あるし、長期休暇も合宿とか研修授業あるみたいだから、頻繁になんて帰れないよ」

「つ……………お、お嬢……………雄英に進学すんの、やっぱ辞めない？」

戯れ言を言い出した巧朗に、二人分の拳が叩き込まれる。

もちろんママと私だ。

巧朗が泣き出した。とても鬱陶しかった。

「それで、アパ^じートは^じどうする？」

「……………わがままでけど、借りたままにしたい」

「……………わかった。私が時々掃除に来てあげる。ただし、大家さんの交渉はあんたがやってみなさい」

「……………ツうん！ありがとう、ママ！」

大家さんとの交渉は思っていたよりすんなり終わった。

私達親子をずっと見守ってきてくれた人だからか、家賃の滞納さえなければ好きにして良いと了承してくれた。

それよりも雄英合格を一緒に喜んでくれた。本当にありがたい。

新居もママと一緒に（途中やけっぱちになった巧朗も合流して）吟味を重ね、学校から徒歩15分、オートロックと防犯カメラ、防犯センサー付きの賃貸マンションに決まった。

今までのアパートと比べると別格の住み家である。

この家賃を気にしなくていいとか……ママと巧朗の金銭感覚は大分おかしい。

—————

少々学校探索をしたかったので早めに家を出たら、指定された時間より30分以上早く学校に着く事ができた。

私の身長の上3倍以上はありそうな教室の扉を開けると、1Aの教室の中には既に3人

の人影がある。

教室の扉側に近い、後の委員長、飯田天哉くん。

窓側の一番後ろのポニーテールのナイスバディ、後の副委員長、八百萬百ちゃん。

真ん中の列の一番前、クールな音楽少女、耳郎響香ちゃん。

一番乗りでもおかしくない時間帯だと思つたが、雄英生の朝は早いらしい。

「おはよう！俺は私立聡明中学出身の飯田天哉だ！早速だが、黒板に席順の記載があるから、確認するように！」

「あー、うん。丁寧にありがとうね」

素早い動きで詰め寄ってくる飯田くんに軽く仰け反りそうになつてしまつたが、腹筋で耐える。

「えっと、私は星川結子。櫻木川中学出身」

「星川くんか！ クラスメイトとして、これからよろしく頼む！」

「よろしく」

飯田くんと固い握手を交わすと、彼は満足そうに自分の席に帰つていった。

初対面で圧が強すぎやしないだろうか、飯田くんや。

一息ついて、黒板に書かれた席順を確認すると、私の席は、窓側の前から二番目。

思わず黒板を二度見してしまった。

これはもう素直に驚いた。

私の席の前後、前には爆豪勝己、
後ろには緑谷出久。
みどりやいずく

主役達に挟まれた……なんで？

ああ、あいうえお順の出席番号ですね……わかります。

ヒーロー科で入学さえできれば、クラスにこだわりはないはずだった。

ヒーロー科に入って、個性の使用可能な施設を使える事が出来ればいいはずだった。
けれどこれは……

(二人のゴタゴタに巻き込まれないよう注意しないと)

夏まで約3か月しかないのだから。

意識が沈みかけた所で、誰かの手が私の肩に乗せられた。

振り向くとそこには、おかつぱと長い福耳フラダが特徴的な女の子。

「あんた、大丈夫？ 黒板見て急に固まったけど……」

「なに！具合でも悪いのか!？」

「いや、元氣だよ。結構良い席だなんて思ったのと、自分の周りの席に誰が来るのかなって見てただけ」

遠い席から即座に反応した飯田くんに内心ビビりつつ、手を振って事でその場に押し止める。

「なんだ、そうだったんだ。あ、ウチは耳郎響香。よろしくね」

「星川結子。よろしく」

耳郎ちゃんとの自己紹介を終え、私は自分の席に荷物を置いて来た道を引き返す。そのまま教室を出ようとするのと再び耳郎ちゃんに呼び止められた。

「どっか行くの?」

「校内探検。トレーニングルームの場所とか保健室の場所とか確認しておきたくて」

「へえ。ねえ、ウチも一緒に行ってもいい?」

「うん。いいよ」

元々一人でまわるつもりだったが、断るのもおかしな話だろう。

校内を見て回る間、ほんの少し、耳郎ちゃんとお話した。

お互いの出身中学や地元の話。お互いの好きなもの。

私が一人暮らしを始めた事や耳郎ちゃんは自宅から学校に通う事。

驚いたのは耳郎ちゃんが母がよく歌っていた曲を知っていた事。

マイナーな曲だと思っていたが、耳郎ちゃんの音楽知識は幅広い。

流石は音楽少女の耳郎ちゃんらしい。

あと、最初は耳郎ちゃんと呼んでいたが、「呼び捨てでいいよ」と言われたので、今後は遠慮なく響香と呼ばせてもらう事にした。私の事も結子と呼んでもらう事になった。

いくつもあるトレーニングルームへの行き方を全て把握する事はできなかったが、保健室や食堂、職員室の場所などは粗方覚えた。

二人で教室に戻る頃には、すでにクラスメイトのほとんどが登校し、席が埋まっていた。

和気あいあいとしている様子はなく、まだ皆どこかよそよそしい。

1Aのクラスは仲が良く団結しているイメージが強かったから、少し驚いた。

自分の席から動かさず、興味深そうに視線だけをこちらに寄こす様子が、私には初々しく見えた。

(……ああ、そっか。皆は今日から始まるんだね)

「なんか席に着いてた方が良いみたい？」

「そうだね。時間も近いし」

響香と別れ、といっても席はさほど離れてはいないのだけれど、私も自分の席に向か

うと、前の席には既に彼がいた。

見た目の不良っぽさからは想像できない天才肌の優等生。

主人公の幼馴染——爆豪勝己。

思わず上から下へ、じっくりとなめるように見てしまった。当然のように彼も気づいで、こちらを睨み返してきた。

「何見てんだ、コラ」

「いや、初日からネクタイ忘れたのかなって」

「誰が忘れるか!! 暑苦しいから着けてねえだけだ!!」

「あ、そう」

それ以上会話は続かなかった。

正直、現在の^{いま}彼には好感もなければ興味もない。

私はそのまま自分の席に着くと、響香がきよとんとこちらを見ていた。よく見ると他のクラスの皆も。

爆豪くんが大きい声を出すから、視線を集めてしまったらしい。

彼は一つ舌打ちをすると、机の上に足を乗せた。

それに即座に反応したのが、我らが委員長（予定）。

「君！机に足をかけるな！」

と、彼に詰め寄って行った。

ここから先は見たことがある光景だった。

既に1Aの教室の扉から、彼が顔主人公を覗かせている。

その後ろから歩いてくるヒロインと、奥の方に見える寝袋の塊。

集中しよう。

私は1Aのクラスに急に飛び込んだ、”不純物”だ。

初日から除籍されないよう、全力で頑張ろう。

—————

よれた黒い服に、ぼさついた長めの髪と無精髭。

寝袋で登場した一見小汚なく見える我らが担任、相澤消太あいざわしょうた先生。

先生から体操着を受け取って、それに着替えた私達はグラウンドへと集まっていた。

これから行うのは、個性把握テスト。

全部で8種目。

ソフトボール投げ

立ち幅跳び

50m走

持久走

握力

反復横飛び

上体起こし

長座体前屈

入学式やガイダンスの時間は全て省略。

相澤先生曰く、「ヒーローになるならそんな悠長な行事に出る時間ないよ」と。

また“自由”が校風の雄英高校、それは“先生側”にも適用される。

学校行事の参加可否だけでなく、それは教える生徒の選別も。

爆豪勝己によるソフトボール投げのデモンストレーションが終わり、トータルの成績

最下位には“除籍処分”を告げられた。

ざわつくクラスを先生はこの言葉で黙らせた。

”Plus Ultra”更に向こうへシー

ー全力で乗り越えて来い”

まずは50m走の記録から測るらしく、出席番号順で2人ずつ先生から名前を呼び上げられた。

さて、私はどうやって記録を作ろう。

足は速い方だと思うし、普通に走ってもそれなりのタイムにはなるだろうが、折角の個性把握テストなのだから、なるべく個性を使っていきたい。

漫画では青山くんがレーザーを推進力として使っていたが……

私はレーザーを推進力として使えない。

星から打ち出されるレーザーは、どんなに威力を高めても、どんなに飛距離を伸ばしても、”始点”である星は位置が変わらない。

青山くんのレーザーと違って反動なく、双方向に衝撃がいかないのだ。

科学的に説明できないこの現象は、やはり超常だからと言わざるおえない。

パムーンが使っていた身体強化の技『オルゴ・ファルゼルク』を使う事ができれば、話は簡単なのだが、イメージが上手く掴めず、成功した事が無い。

操作して身体に星をくつつけたり、身体表面にエネルギーを纏わせる事はできないのだが、そこから身体強化に繋がるといえるのは、どういう事だろう。某少年探偵のように電気でツボを刺激する感じだろうか。

そもそもこのツボを刺激したら筋力強化なんてできるんだろう…

…うん、考えるのやめよう。

(レーザーでは無理だけど、星自体を動かして体を押させる？いや、無理じゃない？) 宙に展開する私の星自体には、重さがほとんどない。

母の”月”もそうだったが、手のひらサイズの見ただ目からは想像できないほど軽い。

それで何かを持ち上げようとしたり、押そうとしたりすると、全身にずっしりとした重さを感じるのだ。操作性も格段に鈍る。

幼少期、どうにか星に乗って空中飛行をやりたいと頑張った時もあるが、早々に諦めることになった。

(…：最高速度で加速させた星をぶつければ、その衝撃で前に進めるかも。その場合、私自身の大ダメージを負うけど…：いや、それこそレーザーで打って押しだせばよくない？ 星を背中にくつつけて盾を張ればなんとかいける、かな?)

「次、星川と緑谷」

名前を呼ばれて、レーンに並ぶ。

隣に顔を強ばらせている緑谷出久（主人公）がいるが、気にしている余裕が、私にもない。

（イチかバチか！）

「ヨォーイ スタート！」

——キーン——甲高い音で出現する”星”。

同時に私もスタートダッシュをきる。

星は自分より約1m程後方に5つと背中や足にくつつける形で5つ。

展開した後ろの星に高威力でレーザーを打てるように力を集中させ、

「ファシルド！——とッ、ファルガ！」

身体にくつつけた5つの星同士をエネルギー状の『辺』で結び、『辺』の内側にエネルギー状の『面』を張る。

威力を高められたレーザーが5本、星から打ちだされ、盾にぶつかる瞬間に、私は両足を地面から離す。

「oooooooooo！」

グンツと全身にかかる衝撃と慣性に驚いている間に、ピピツと機械音がゴールを知らせる。

「oooooooooo、3秒58」

わつとクラスメイトのわく声が聞こえたが、私はというとゴールより数十メートル離れた場所でグラウンドを転がっていた。

ゴールの音は聞こえていたし、レーザーもすぐに止めたのだが、威力を殺す方法を考えていなかった私は、ゴールを超えて尚ふつとび続けたのだ。

地面になんとか着地しようと足を地面に着けるも、勢いがつきすぎて何度も前転を繰り返すはめになった。三半規管は強い方と自負はあったが、流星に目が回った。

「星川、とつと起きて次の記録を測れ」

「は、はい……」

立ちあがってみんなの元に向かうが、ふらふらとあちこちに身体が行ってしまつて、見かねた響香が迎えに来てくれた。

「記録はすごいのになんかバカっぽい」

「やめて響香、傷口抉ってかないで」

「なに！怪我をしたのか!？」

「違うよ飯田くん。無傷だけど、無傷じゃないんだよ」

「……………？ つまりどういうことだ!？」

「……………うん。もう飯田くんはずつとそのままでいてね」

「意味がわからないんだが!？」

「面倒くさくなつたからつて適当に投げないの」

ひとまずはずごい記録だったと飯田くんに誉められながら、響香と一緒に次の種目を測りに移動していると、ふと爆豪くんと目が合った。

思い切り舌打ちされた。

ちよつとイラつとした。

第2種目 握力

これは星で”縛る”方法をとろう。

2つ星を出現させ、星の間に光の紐を結ぶ。

技名がないと呼びにくいので、今後は”光糸こうし”と呼ぼう。

光糸を握力計の真ん中で交差させ、ぐるんぐるんに回す。

その上に見せかけであるが手を添え、星同士を逆方向へ移動させる。

これは時々モンペ並に過保護を拗らせた巧朗を縛り上げる時によく使っていた。

ピピツと握力計が計測が終わった事を知らせた。

167kgw

素の握力は30になるかならないかなので、倍以上の記録を出せたことになる。やったね。

第3種目 立ち幅跳び

これは50m走と同じ方法の盾とレーザーの2重使いで乗りきった。

今回は砂場を越えた辺りで着地できるよう、威力の調整もしっかりした。

第4種目 反復横飛び

これは普通に測った。

両側からレーザーで何度も打つか考えたが、流星に身体が持たないだろう。他に星の活用性が思い付かなかった。

第5種目 ソフトボール投げ

爆豪くんがデモンストレーションをしてくれたソフトボール投げ。

この種目では一つ試してみたいことがあった。

「相澤先生、質問してもよろしいですか？」

「なんだ」

”星”を白線の外に配置しておくのはありですか？

「なしだ。個性で作った創造物も白線から越えた瞬間、記録なしとする」

「……………わかりました」

残念。ここはレーザーで打ち出すことにしよう。

星を一つ出現させ、”力を溜める”。

50m走や立ち幅跳びの時の簡易的に力を集中させるのではなく、集中させた力を溜める続ける、所謂チャージ状態だ。

当然、チャージをする程、星一発分のレーザーの威力は上がる。

チャージされた星は徐々に輝きを増す。

もうそろそろ良いかなと、私はボールを白線の外へ投げ、そのボールに向かって威力をあげたレーザーを当てた。

レーザーが当たったボールは瞬く間に遠くへ飛んでいく。

記録

ー531mー

狙った斜め上45°の角度で打ち上げる事ができて、私は満足である。

続けて2投目に入ろうと星にチャージを始めた時、先生にストップをかけられた。

「記録がなしになって良ければ、さっきの試してみろ」

「え、良いんですか？」

「むしろお前が2投目の記録がなしになって構わないなら、だ。やるか？」

「やります!!」

そして先生は言った。「お前が思う個性の最大限の活用法、見せてみる」と。

まずは自分に出せる限界量まで星を出す。

今回は出現スピードよりも量と操作性重視なので一つずつ星をイメージしながら出現させる。

反射的に出した星よりも、しっかりイメージを固めて出した星の方が操作性がしやすく感じるのだ。

ポポポコン、ポポポコンと、どこか間抜けな音が連続してグラウンドに響く中、出した無数の星はボール投げのライン上に散らす。目が届かなくなる程、遠くにも。

そしてグラウンドやその先に散らした星との感覚共有に集中する為、私は一旦、目を

閉じた。

先生が何かを言ったようで、クラスがざわついていている気がするが、あまり耳に入っていない。声が遠くに聞こえるようだ。

星同士、距離間も等間隔にちゃんと散っている。

――準備は整った。

私はボールを前方へ軽く投げる。

レーザーを打ち込む角度は1回目で掴んだ。

「フアルガー！」

手元に残し、チャージしていた星で宙に浮いたボールを打ち上げる。

強く輝くレーザーはボールをあつという間に視界の外へと運んでいく。

ここまでは1回目と変わらない。

ここからが、試したかった。

星たちの感知でボールが推進力を失い、落ち始めたのを感じた。

「ファアルガ」

ボールに最も近い星を操作し、再度ボールにレーザーを打ち込む。

角度はもちろん斜め上45°。

更にボールは高く遠くまで飛んでいく。

これをボールが感知できなくなる限界まで繰り返す。

これが自身の”星”の感知力と操作性を活かした個性の最大限の活用方法。

神野の街中では、こんな事を試せる機会は流星になかった。

飛距離は2kmを越えたあたりだろうか。

チャージしながらレーザーを打つ所為か、一発ごとに疲労感が押し寄せてくる。

でも、まだまだこんなもんじゃない。

「ファアルガ！」

—————

「すい」……」

思わずそんな眩きが漏れた。

僕の一つ前の席の女の子。

円の中、彼女はボールが飛んで行つた方向をじつと見据え、不敵に笑つていた。時折、何かを言つては、肩で息をしている様子はあるが、彼女の笑みは崩れない。相澤先生の手元にある計測機からも、まだボールの着地を知らせる音はしない。

(これが、雄英……これが実技試験一位の実力……)

一体どこまで記録を伸ばしているんだろう。

それに対して、僕はまだ何一つ良い記録が出せていない。

焦りばかり募る中、「あ」と抜けた声が深く沈みかけていた僕の思考を止めた。

「外しちゃいました……」

暫くして、ピピッと相澤先生の手元で計測器が鳴った。

—————

「どのくらいまで行ったか、わかるか？」

手元の計測結果を見ながら、目の前の女生徒に問いかける。

少女は疲労した様子で、上がった息を整えているところだった。

「……たぶん5100m前後だと思えます」

「5123mだ。感知範囲は5kmくらいが限界のようだな。外した原因は？」

「風に煽られてボールの軌道が予測から大きくずれました。星で追いかけてましたが、感知した位置とも誤差があつて、ボールにレーザーを当てる事ができませんでした」

（星の操作自体は5km先でも可能……しかしそれは動かず一方向のみに焦点を絞ったときか）

「全方向に同じように個性を使った場合、どのくらいまでいけそうだ？」

「……2kmくらいなら」

「お前自身が動きながら個性を使った場合は？」

「……100mいくか、いかないか」

大分渋い顔をしながら少女は言う。

（なるほどな、だから入試後半はポイントの伸びが悪い。他の受験生を考慮した訳では

なく、移動しながらで狙いが絞られたのか)

「わかった。さっき言った通り、1回目の531mが正式な記録になる。いいな？」

「はい。むしろ、わがままを言ったみたいで……すみません」

「謝罪はいらない。俺がやってみると言ったんだ。わかったら、早く次に代われ」

「……はい！」

—————

全身がだるく重たい。疲れのせいか、眠気もひどい。

感知とレーザーの組み合わせをここまで思いっきり試したのは初めてだった。

そもそもレーザー自体、ヒーローに怒られた時からあまり練習できていなかったから、自分の事なのにイマイチ限界がわからない。

あくびを噛み殺しながら皆が待機してる場所へ行くと、ぽかんと口を開けている響香がいた。

クールなイメージが強い響香には珍しい表情だ。

「響香、口開いているよー？」

「……あんたつて見かけによらず凄い奴だったんだね」

「おっと、その『見かけによらず』つてところ、ちよつと引つかかるんだけど、詳しく聞いてもっ。」

「いや、悪い意味じゃなくて、ヒーローっぽく見えたから……て、なんか眠たげ？」

と、響香は首を傾げる。

「まあ、さっきのは流石に疲れたからね。眠気もピークかも」

「まだ種目残ってるけど大丈夫なの？」

「……な、なんとか」

そうだった。

これはまだ5種目めで、あと3種目残っている。

(ペース配分間違えたかも……)

若干、冷や汗をかいていると、「まあ、今まで結構いい記録出してるし、除籍はないんじゃない？」と、響香ちゃんも言ってくれるが、できれば残りの3種目でもいい成績を残したいところだ。

突如、またクラスがざわついた。

緑谷くんが第1投目を投げたところだった。

記録は芳しくなく、クラスから心配そうな声があがる。

会話の内容は聞こえないが、更に顔を青ざめさせた緑谷くんは、相澤先生は何かを言っている様子が見えた。

「指導を受けていたようだが」

「除籍宣告だろ」

と、どこか覚えのあるやり取りが聞こえると、緑谷くんは2投目の投球フォームに入った。

彼はしきりになにか呟いているようで、口元が小さく動いている。

彼がボールを離す瞬間、まるで小さな爆発が起こったかのようだった。

S M A S Hと大きく叫んだ彼の向こう側へ、ボールはどんどん小さくなって消えていく。

彼が初めて出した大記録だった。

ボールを投げ終わった後、彼の人差し指は赤紫に変色し、腫れ上がっていた。

それでも痛みを堪え、涙を浮かべながらも笑う姿に思わず言葉がもれた。

「すい〜」

「でも、

「負けたくないな……」

その後、爆豪くんが緑谷くんに掴みかかろうとする一悶着があったが、個性把握テストは続く。

第6種目の長座体前屈は掌から星を連続して出すことで好成績を出し、

第7種目の上体起こしは体を起き上がらせる時、星に補助してもらった。さすがに

レーザーは使えないので、加速させた星を何度も背中につつける荒業だった。盾を張っても衝撃は伝わり、若干痛い。

最後の種目の持久走は、直線コースでは星のレーザーと盾でタイムを縮めたが、コーナリングの部分は普通に走らざるをえなかった。

レーザーも自分の意思で曲げることができれば良いのだが、如何せん直線にしか打つ事ができない。

なんとか上位陣にくい込めた為、まあまあといったところだろうか。

これで、全ての種目の計測が終わった。

個性把握テストの成績発表は、ホログラム映像によって先生から一括開示にて行われる。

固唾を飲んで見守る中、相澤先生は手元の計器を操作すると同時、

「ちなみに除籍はウソな」

と、平々凡々と言つてのけた。更に悪い笑みを浮かべながら言葉を続ける。

「君らの最大限を引き出す、合理的虚偽」

一気にやかましくなるクラスに、響香は耳を塞いでいた。

特にやかましかったのは飯田くんと緑谷くんだろうか。

飯田くんは眼鏡にヒビが入るほど叫んでいたし、緑谷くんはもう全身で驚いていた。小刻みに震えているのか、輪郭がぼやけて見える程で笑った。

成績順位は――

1位 八百万 百

2位 星川 結子

3位 轟 焦凍

4位 爆豪 勝己

19位 峰田 実

20位 緑谷 出久

今日はこの後、教室にあるカリキュラム等の書類を受け取って終わりである。

先生も一足先にグラウンドから去り、生徒も各々、更衣室へ向かう中、私は一つあく

びをこぼし、歩き出した。

帰る間際、私は相澤先生に呼び止められた。

「職員室へ来い」と何が何やらわからないまま、先生の後について行く。

職員室では、相澤先生の机の上に、一つ小包が置かれていた。

「学校にお前宛の荷物が届いた。悪いが差出人の記載がなかったから、こちらで勝手に開けさせてもらった」

「私宛?……なんで学校に?」

「それはこれを読めばわかる」

と、先生に差し出されたのは白い便箋。

『初めまして』

そんな書き出しから、手紙は始まった。

『私は、貴方の祖母にあたる、目空^{めそら} 雨露子^{うろこ}と申します。』

「……………え？」

文字の意味をうまく理解できず、手紙から顔をあげると、ちょうど椅子に座った所の先生と目があつた。

先を読めと促されているようだった。

『貴方が雄英高校のそれもヒーロー科に入学すると知り、今日、筆をとりました。雄英高校への入学、本当におめでとうございます。』

苦手な勉強もすごく頑張っていたと聞きました。

突然の手紙に、貴方は今、大変驚いていると思います。祖母と言われてもよくわからないでしょう。

なので、少しだけ、意気地無しの私の事を書きます。

私は、青森県の田舎の方で旦那と二人で暮らしています。

旦那との間には3人の子供に恵まれ、長男として生まれたのが、貴方の父、目空めそら 光線こうせんでした。

息子はちよつと変わった子供で、友達と遊ぶことよりも機械の分解や改造に熱中するような子でした。

その趣味が興じて、息子はヒーローのサポートアイテムを作る会社へ就職しましたが、就職してからは仕事ばかりで、親しい友人の話も、浮ついた話も聞く事がなく、親として心配していました。

けれどある日、息子から結婚を考えている人がいると聞きました。

息子に好い人ができたことは嬉しかったけど、相手の方の職業がホステスと聞いて、失礼な話だけど、息子は騙されてるんじゃないかと疑いました。

それでも息子が素敵な人だと強くすすめるから、会ってみる事になったけれど、あの事故が起きてしまった。

私はとても悲しくて、心を取り乱してしまった。息子の葬儀に来てくれた月子つきこさんにとてもひどい言葉をあげてしまった。

月子さんは何も悪くないのに、何度も私に頭を下げていたのを覚えています。

本当に、本当に申し訳ないことをしました。

それからの私は息子の死を悼む日々を過ごしました。

日が経ち、年月が進むにつれて、ようやく息子の死を受け入れられるようになった時、ふと、月子さんの事を思い出しました。

彼女は私になんて会いたくないだろうとも思ったのだけど、もし許されるなら葬儀の時のお詫びをしたくて、私は息子から聞いていた彼女の職場へ会いに行きました。

彼女は長くお休みしているようで、その日は会えなかったのだけれど、偶然、帰り際に月子さんを見掛けました。

小さな貴方を抱えて歩いているところでした。

その時初めて、貴方が生まれていることを知りました。

すぐに謝りに行ければ良かったのに、私は怖じ気づいてしまった。

一番助けが欲しい時に、私は月子さんに酷い言葉を投げつけ、突き放してしまったから、きっと恨まれていると思いました。

それでも、貴方たち家族の事はずっと気になって、時折、息子の後輩だった接客くんせつきやくに様子を聞いたりしていました。

接客くんの話聞けば、彼女が私を恨んでないことはすぐにわかりました。

彼女はただ、私と同じように息子の死を悲しんで、悼んでくれているだけだった。

月子さんは息子の話の通り、とても素敵な人だと思います。

月子さんは貴方をとても良く育ててくれたし、貴方もとても良い子に育ててくれた。それでも私は意気地無しだったから、貴方たち家族にちゃんと会いに行くことはできなかった。

時折、影から顔を覗きに行くことが精一杯だった。

でも、一度だけ貴方とお話した事があるの。

貴方は私が困っているように見えたのね。

大丈夫ですかと、話しかけてくれた。

私は上手くお返事できなかつたけれど、間近で見た貴方の目元が息子とそっくりだったのを覚えています。

笑った顔がとても愛らしかった。

貴方も月子さんも、二人で幸せそうに暮らしているようだったから、

今更、横から水を指すのもと、私はだんだん会いに行くのを遠慮するようになりました。

でも、もっと早くに会いに行くべきでした。

月子さんのこと、本当に残念でした。

私は貴方たち家族に何一つしてあげられなかった。

後悔に明け暮れていた時、接客くんから貴方がヒーローを目指していると聞きまし
た。

ヒーローのサポートアイテムを作っていた息子の子供がヒーローを目指しているな
んて、なんて巡り合わせでしょう。

送った小包は息子が働いていた会社から返却された遺品です。

息子の研究が、きっとヒーローを目指す貴方の助けになると思います。

そして、私が持っているより貴方に受け取って貰えた方が、息子も喜ぶと思います。
なんて手前勝手な話だとは思いますが、少しずつでも貴方たち家族の力になりたいと
強く思っています。

そして、

もしも許されるなら、

月子さんを息子と一緒に弔わせて頂けないでしょうか。

厚顔無恥なお願いとわかつているけれど、もし許されるならどうか。贖罪の機会を、私に下さい。』

その後、祖母の連絡先等や転居先の住所がわからず、小包を雄英高校に送ったことの謝罪が綴られていた。

巧朗に聞けば、転居先の住所はわかっただろうに、それよりも気持ちが急いでいたのだろうか。

読み終わって顔をあげたとき、再び相澤先生と目があつた。

先生は少し驚いていたようだけれど、私はそれよりも机の上に置かれた小包に目が行った。

小包の中には、長年、父が開発案や研究を書き留めていたと思われるノートがたくさん入っていた。

「明日の授業には間に合わんが、コスチュームやサポートアイテムの再申請はいつでもできるぞ」

そう相澤先生から差し出されたのは、コスチュームの申請届とティッシュの箱。

私は申請届を受け取りながら、ティッシュを一枚拝借し濡れた頬をおさえた。

「ありがとう、ごさいます……」

小さな声になってしまったけど、今日は先生も許してくれると思う。

後に、なかなか泣き止まなかった私のせいで、他の先生方から相澤先生にあらぬ嫌疑がかけられたのは本当に申し訳なかった。

そして、家に帰ってから見た父の研究内容に、度肝を抜かれたのは、また後日。